



①9 中国の自傷行為

コロナ戦の勝者？

新型コロナが始まってから、携帯に流れてくる中国メディアの速報を気持ち悪いと感じるようになった。ある時から、速報の大半が「世界のコロナ情報」になり、海外の流行状況がどれだけひどいか、各国から持ち込まれたウイルスで中国国内にどんな被害が出ているかをしつこく報道し始めたからだ。

中国当局の意図は明確。海外の被害状況を強調して、国内でそれを封じ込めた政権の功績を強調することだ。しかも習近平は同時にマスク外交を展開し、自分を世界の救世主としてアピール。ものすごい倒錯感だ。当局の情報統制下にある中国人民と違って、中国以外のメディアから自由に情報を得られる世界の人は、中国の行動を注視している。

中国当局は自分たちを、コロナ戦役の「勝者」として印象付けようとする。しかし、おそらくそうはならない。習近平が力を入れてきた「中国の夢」の可能性は、このコロナで砕けた。中国は今後も、軍事経済大国への道を歩み続けるかもしれない。でも、「中国の夢」はついでたのだ。

他者のリスペクト

習近平によれば、「中国の夢」とは「中華民族の偉大な復興の道」を実現することだ。では「復興」とは、どのような状態に戻ることか。これはまさに、歴史観の問題である。

日本ではよく、中国には中華思想がある、と言われる。この場合の中華思想とは、自分を世界の中心と信じ、自分に逆らうものは武力で封じ込めてよいのだ、といった考え方だろう。

しかし、中国と接する機会の多い方なら、外国人にそのように見られることを、中国人が極端に嫌うことをよくご存知のはず。なぜなら彼らの歴史観においては、中国はそもそも精神性、つまり徳の高い平和的な国であり、大国だから強い武力も持つが、周辺国は中国の精神性に打たれ、おのずから服従してくるものだからだ。

「中国の夢」は力では完成しない。他者から心のリスペクトが得られて初めて、その実現可能性が見えてくるのだ。

習近平の悲劇

いろいろな議論はあれど、習近平が「中国の夢」の実現のためにやってきたことは、ある程度評価できると筆者は思っていた。彼は偉大な指導者として歴史に名を残す夢を抱き、内外で「善政」を行おうとした。彼が総書記になったとき、中国は大気汚染と汚職にまみれ、極端なナショナリズムが蔓延（まんえん）して、日系企業や商店への破壊行為すらなんとなく許されるおかしい国だった。習近平は、かなり個性的なやり方だった

が、難題にちゃんと向き合って中国の軌道修正をした。中国を世界から尊敬される偉大な国にするため、彼が本気なのは伝わってきた。

ところが、彼が頑張れば頑張るほど、国内で彼の権威は突出したものになり、政治の雰囲気は左傾化した。彼の権威を守ることがいつの間にか目的化し、当局は中国のやり方を批判する海外の勢力に苛立ちを強めた。昨年中、米中貿易戦争と香港のデモで、中国当局はすっかり守勢に入ってしまった。

そこを襲ったのが新型コロナだ。政権の利益をなにより重視する権威主義体制の下で、中国は世界保健機関(WHO)への迅速な情報提供すらできなかつた。中国の感染症の権威、鍾南山のチームも、もし政府の関与があつたら5日早かったら、感染者数を3分の1に抑えられたと推測している。結果的には中国という社会体制が、世界にリアルな脅威をもたらしてしまった。

しかし、守りに立たされた習近平政権は、申し訳ないそぶりを見せるどころか、戦闘的な戦狼外交で外部勢力を口汚く攻撃し、自国の経済力を振りかざして制裁を繰り返した。さらには国際公約を破って香港で国家安全法。一体、誰がこんな中国をリスペクトできるのだろうか。

中国政府は自国の評判の回復を試み、6月7日日曜、発展途上国からの借款回収延期を発表。しかし、その程度で他国の心は戻らない。習近平は「中国の夢」のために努力したのに、いつしか彼自身が夢を阻害する存在になってしまった。ボタンのかけ違いはどこで起きたのか。何か間違いだったのか。

(益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授)

コロナ禍が砕く「中国の夢」